

日本海でつよいエコーが見られる。それが山岳地帯にかかる、デヒューズして弱くなる。ところが太平洋上に出るとまた強くなる。そういう意味からするとたとえば摩擦のような地形の影響はきいていると思う。しかし、単に地形で風が収束したら、そこに強いバンドが形成され停滞するとは私には考えられない。それは新潟の豪雨の場合がよい例である。エコー発生源がもう少し北の方であれば秋田県の方に降ってもよいと思う。

もちろん地形も効いていると思うが、年降水量の分布などに大きく作用し、集中豪雨の場合には2次的なものではなからうか。

レーダーの立場からすると、帯状エコーの風上側にある強い対流セルを発生させているところではどういふものか、また、数百 km ものエコー帯の形成・維持機構はなにかが重要で、後者には発生域とその風下の成層状態と 300 mb またはもう少し高いところまでの風の構造が一番大きな役割をはたしていると思われる。

局地的な地形は少くとも第一次の要因ではないと思う。

松本(座長): 力学の方面から発言してほしい。

広田(東大): あるスケールのじょう乱が発達し易い状態になっていると思うので台風の場合に力学的バランスを取扱うが、集中豪雨の場合にもそのような考え方がつかえると思う。

後町(京大): セルがライン状になるモデルを門脇さんが提示されたが、このモデルは今回の解析から得られたのか。

門脇(東管): 線状エコーの形成機構のモデルとして示したものは Newton, 立平, Atlas などのものでセルの追跡 RHI でのエコー特性の観測などが裏付けになっている。羽越豪雨、七月豪雨(神戸ふぎん)についてセルの追跡等を行ったが、このようなモデルでかなりよく説明できる場合もあるように思う。

松本(座長): これで終了します。

Calendar of Events

World Meteorological Organization

24-26 January 1968	Working Group on the Stratospheric Warming Experiment (CAS), Geneva, Switzerland
7-10 February 1968	Executive Committee Panel on WMO Voluntary Assistance Programme, 1st session, Geneva, Switzerland
18-29 March 1968	Scientific and Technical Conference on Aeronautical Meteorology (CAeM), London, United Kingdom
25 March - 5 April 1968	3rd session of Commission for Hydrometeorology (CHy), Rio de Janeiro, Brazil
April 1968	3rd session of Executive Committee Panel of Experts on Meteorological Education and Training, Cairo, United Arab Republic

Other International Organizations

28 February - 8 March 1968	Group of Experts on Marine Science and Technology, New York, U.S.A.
5-23 March 1968	Conference on North Atlantic Ocean Stations (ICAO), Paris, France
14-27 August 1968	United Nations Conference on the Exploration and Peaceful Uses of Outer Space, Vienna, Austria
20-24 August 1968	Seventh Plenary Meeting of the World Power Conference, Moscow, U.S.S.R.